

両親の夫婦関係が子どもの結婚観へ与える影響

土井裕貴
(東北大学教育学部)

1 問題関心

厚生労働省の「平成 23 年度人口動態調査」¹ならびに内閣府「平成 27 年版少子化社会対策白書」²によると、日本の平均初婚年齢は、1993 年(平成 5 年)では夫が 28.4 歳、妻が 26.1 歳であったが、その後上昇傾向が続き 2013 年(平成 25 年)には夫が 30.9 歳、妻が 29.3 歳であり、結婚年齢が高くなる晩婚化が進行している。また、生涯未婚率は 1980 年(昭和 55 年)と比較すると、男性は 2.6%から 20.1%へ、女性は 4.5%から 10.6%へ、それぞれ上昇している。このように、日本においては晩婚化、非婚化が進んでいる。その背景には、異性と会い、交際する「機会」が減少しているのか、それとも結婚に対する「意識」が消極的になっているなど様々な背景が考えられる。国立社会保障・人口問題研究所³によると、「いずれは結婚しようとする未婚者の割合」は、1987 年(昭和 62 年)では男性 91.8%、女性 92.9%であったが、2015 年(平成 27 年)には男性 85.7%、女性 89.3%となっており、結婚したいという願望が減少してきている。しかし、減少傾向であるものの、8 割を超える多くの若者が結婚したいとは考えており、若者の結婚願望は決して低いわけではない。一方で「一生結婚するつもりはない」と答える若者は微増しており、2015 年(平成 27 年)では男性 12.0%、女性 8.0%となった。このように現代では結婚に対する意識が変容してきている。そこで今回は結婚に対する「意識」、つまり結婚したいという願望はなにに起因するのかについて社会人に対するアンケート調査を用いて考察する。

2 先行研究と本研究の意義

今回の分析を行うにあたり、結婚意欲は結婚の決定に影響を与えるということが前提となっている。つまり、結婚したいと思っているほど、結婚する確率が高くなることを自明としているが、このことに関して検討した研究に水落ほか(2010)がある。水落らは公益財団法人家計経済研究所の「消費生活に関するパネル調査」を用いて分析した結果、女性においては、結婚願望が強いほど結婚する確率が高くなることが明らかになっ

¹厚生労働省「平成 23 年人口動態統計月報年計(概数)の概況:結果の概要」

(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai11/kekka04.html> 最終アクセス日 2017/1/07)

²内閣府「平成 27 年版少子化社会対策白書」

(http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2015/27webhonpen/html/b1_s1-1-3.html 最終アクセス日 2016/11/11)

³国立社会保障・人口問題研究所「第 15 回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)」(http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp 最終アクセス日 2017/02/13)

たと指摘している。ただ、この研究は従属変数を「結婚確率」とし、独立変数を「結婚願望」としており「結婚願望」が何によって規定されるのかについては分析していない⁴。

ところで心理学では、未婚者が抱く自らの将来の結婚に対する期待、予測、感情を意味する「結婚観」を従属変数とし、「結婚観」に影響を及ぼす要因を実証的に明らかにしてきたが、その一例として山内・伊藤（2008）がある。山内・伊藤（2008）は大学生へのアンケートを分析した結果、両親の夫婦関係が青年の結婚観に影響を与えていると指摘している。また森岡・望月（1997）は、パートナーとしての配偶者選択に際し、意識的にあるいは無意識的に自分の異性の親をモデルとすると指摘している。これらの心理学の研究から、「結婚願望」には自分の両親の夫婦関係が影響を与えていることが予想される。そしてこの両親の夫婦関係と若者の結婚への態度の関係を分析したのが斎藤（2012）である。斎藤（2012）は親夫婦の関係性を客観的指標⁵と主観的指標⁶という2種類の指標に分けて分析した結果、客観的指標に関しては子どもの結婚への希望に影響を与えているとし、主観的指標に関しては母親に関する項目にのみ有意な効果がみられたとしている。つまり「母親が夫婦関係に満足していれば、子どもの結婚希望は可能性が高くなる」〔斎藤（2012），374頁〕と指摘している。

繰り返しにはなるがこれらの先行研究から、子どもの結婚観に親の影響、特に両親の夫婦関係が影響を与えることが判明しているが、これに関する研究の蓄積はまだ不足しており、特に「両親の夫婦関係」の具体的にどの部分が強く影響しているかについては不足している。そこで今回は「結婚願望」を従属変数とし、独立変数に「両親の夫婦関係」を設定するという理論仮説は先行研究と同じではあるが、作業仮説において「両親の夫婦関係」を「両親の夫婦仲」、「両親の生活上の自由度」、そして両親の結婚生活全体を考慮して子どもが形成する「両親のような結婚生活への憧れ」という3つに分類することで、両親の夫婦関係のどの部分が子どもの結婚観に影響を与えているのか明らかにすることに本研究の意義がある。この3つに分類した理由については第3節に記述する。

3 仮説

本研究では、「両親の夫婦関係は、結婚観に影響を与える」を理論仮説として設定する。先行研究について整理した第2節においても述べているが、子どもの結婚観は親の夫婦関係の影響を受けることが明らかになっている。しかし結婚観というのは未婚者が抱く自らの将来の結婚に対する期待、予測、感情を意味するものであり、やや抽象的な概念である。また「両親の夫婦関係」という概念も両親のどの関係を指しているものかについては具体性を欠く。そこで、この理論仮説を検証するために3つの作業仮説を立てた。

作業仮説①「両親の夫婦仲を良好と捉える人とそうでないと捉える人では、自身の結婚願望に差がある」

作業仮説②「両親の生活上の自由度が高いと捉える人とそうでないと捉える人では、

⁴ この点に関しては水落らも「今後は、こうした結婚意識がどのように形成されるのかについても明らかにされる必要がある」〔水落ほか（2010），107頁〕としている。

⁵ 例えば、夫婦での外出頻度、けんかの頻度。

⁶ 例えば、夫婦関係満足度、一方の配偶者を大切にしている様子。

自身の結婚願望に差がある」

作業仮説③「両親のような結婚生活に憧れる人とそうでない人では、自身の結婚願望に差がある」

作業仮説①に関しては齋藤（2012）と同じであるが、今回はそれに加えて、両親の夫婦関係を両親の生活上の自由度という観点から分析する。結婚生活は両者が共同して生活を営むことになるので、各個人が自由に使える時間が減少してしまう現象が発生する。このことが結婚することを躊躇させていることが予想される。国立社会保障・人口問題研究所が2010年に行った「第14回出生動向基本調査」によると、18～34歳の未婚者で結婚意思を持つ者が未婚にとどまる理由として「独身の自由さ・気楽さを失いたくない」を25～35歳の男性で25.5%が選択し、12項目中で第4位となっており、25～35歳女性で31.3%が選択し、12項目中で第2位であることが判明している。このことから、結婚後は自由さ・気楽さが失われると考える傾向が若者にはあるといえるが、この考え方に影響を与えているのが、両親の生活上の自由度であると予想したのである。「生活上の自由度」という概念は今回独自に定義したものである。また、両親の特定の夫婦関係ではなく、両親の結婚生活全体をみて両親の結婚生活を肯定的に捉えることで、自身も両親のような結婚生活を送りたい（両親の結婚生活への憧れを持つ）と考え、自身の結婚願望を強くすることが予想される。そこで作業仮説③を作成した。

4 データと分析方法

今回の分析で用いるデータは、2016年7月に東北大学教育学部が実施した「若年者のライフ・スタイルと意識に関する調査<1>」である。調査対象者は日本全国に在住する20歳から40歳までの非学生男女である。実査は調査票の郵送法によって行われた。計画サンプルサイズは200名で、そのうち有効回収数は136名である。

質問紙では質問項目のすべてを「あてはまる=1」、「どちらかといえばあてはまる=2」、「どちらともいえない=3」、「どちらかといえばあてはまらない=4」、「あてはまらない=5」の5件法により調査を行っているが、肯定的評価になるほど点数を高くするため、「あてはまる=5」、「どちらかといえばあてはまる=4」、「どちらともいえない=3」、「どちらかといえばあてはまらない=2」、「あてはまらない=1」と設定しなおしている。サンプルは既婚者ではない未婚者計66名のデータを用いている。

まず、作業仮説①「両親の夫婦仲を良好と捉える人とそうでないと捉える人では、自身の結婚願望に差がある」の分析方法を説明する。q03a, b, c, dを「両親の夫婦仲」という合成変数にして、q04aを「自身の結婚願望」にする。合成変数「両親の夫婦仲」の範囲は4～20であるので、4～12を「両親の夫婦仲を否定的に捉える人(否定群)」13～20を「両親の夫婦仲を肯定的に捉える人(肯定群)」に変換した。なおq03a, b, c, dを合成したときのクロンバックの α 係数は.907であるので内的整合性は十分であると判断した。そして2つのグループ間に差があるかを検証するため、t検定を行った。

次に作業仮説②「両親の生活上の自由度が高いと捉える人とそうでないと捉える人では、自身の結婚願望に差がある」に関しては、q03e, f, g, hを「両親の生活上の自由度」（以下「両親の自由度」）の合成変数にし、q04aを「自身の結婚願望」にする。合成変数「両親の夫婦仲」の範囲は4～20であるので、4～12を「両親の生活上の自由度を

否定的に捉える人(否定群) 13~20 を「両親の生活上の自由度を肯定的に捉える人(肯定群)」に変換した。なお q03e, f, g, h を合成したときのクロンバックの α 係数は.695 であったので、内的整合性は十分であると判断した。そして 2 つのグループ間に差があるかを検証するため、t 検定を行った。

最後に作業仮説③「両親のような結婚したいと捉える人とそうでない人で、結婚願望に差がある」の分析方法を説明する。q04b に対して 1 と 2 を選択した人を否定群、3 を選択した人を普通群、4 と 5 を選択した人を肯定群とした。そしてこの 3 つのグループ間で q04a の得点の差があるかを検証するために分散分析を行った。分散分析では、各グループの平均値に差があるかを検証することが可能だが、具体的にどのグループとどのグループの平均値に差があるかを検証することはできない。そこで分散分析の後に Scheffe 法による多重比較を行った。なお、表 1 は今回分析に用いた変数の平均値と標準偏差を表している。

表 1. 各変数の記述統計量

	平均値	標準偏差
結婚願望	3.76	1.426
両親の夫婦関係	13.48	4.487
両親の自由度	15.82	3.196
両親のような結婚生活への憧れ	2.59	1.425

注) すべてN=66

5 分析結果

仮説①「両親の夫婦仲を良好と捉える人とそうでないと捉える人では、自身の結婚願望に差がある」

表 2 は両親の夫婦仲を否定的に捉えている人(否定群)と肯定的に捉えている人(肯定群)の両者の「結婚願望」の平均値と標準偏差、t 検定の結果を示している。t 検定の結果(t 値=-1.112, 自由度 64, n.s)より、帰無仮説「両親の夫婦仲を良好と捉える人とそうでないと捉える人では、自身の結婚願望に差はない」は棄却されないことが確認される。つまり、仮説①は成立しないことが分かった。

表 2. 両親の夫婦仲に関する両群の結婚願望平均点の t 検定結果

	両親の夫婦仲 肯定的)		両親の夫婦仲 否定的)		値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
結婚願望	3.90	1.411	3.50	1.445	-1.112

仮説②「両親の生活上の自由度が高いと捉えるほど、自身の結婚願望が高くなる」

表 3 は両親の自由度を否定的に捉えている人(否定群)と肯定的に捉えている人(肯定群)の両者の「結婚願望」の平均値と標準偏差、t 検定の結果を示している。t 検定の結果(t 値=-0.807, 自由度 64, n.s)より、帰無仮説「両親の夫婦仲を良好と捉える人とそうでないと捉える人では、自身の結婚願望に差はない」は棄却されないことが確認される。つまり、仮説②は成立しないことが分かった。

表 3. 両親の自由度に関する両群の結婚願望平均点の t 検定結果

	両親の自由度 肯定的)		両親の自由度 否定的)		値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
結婚願望	3.81	1.395	3.38	1.685	-0.807

仮説③「両親のような結婚をしたいと捉える人とそうでない人で、結婚願望に差がある」

表 4.1 は分散分析の結果を示したものである。表 3.1 から、「両親の結婚生活の憧れ」の効果は「結婚願望」に対して有意であった ($F[2, 63]=6.367$, $p<.001$)。このことから、「否定群」・「普通群」・「肯定群」の 3 つの平均値のどこかに差があることが分かった。続いてどの群とどの群の平均値に差があるのか検証するため、Scheffe 法を用いた多重比較を行い、その結果を表 4.2 に示した。表 4.2 から否定群と肯定群の間に差があることが分かり、両親のような結婚生活への強い憧れが自身の結婚願望を高くすることが分かった。

表 4.1 両親のような結婚への憧れに関する各群の結婚願望平均点分散分析結果

	平方和	df	平均平方	F
グループ間	22.215	2	11.107	6.367 ***
グループ内	109.906	63	1.745	
合計	132.121	65		

*** $p<0.01$

表 4.2 両親のような結婚への憧れに関する各群の結婚願望平均点の多重比較結果

両親のような結婚への憧れ		平均差	標準誤差
否定群	普通群	-.406	.404
	肯定群	-1.385 **	.389
普通群	否定群	.406	.404
	肯定群	-.979	.454
肯定群	否定群	1.385 **	.389
	普通群	.979	.454

** $p<0.05$

5.1 追加分析

以上の分析結果から、両親のような結婚生活を送りたいと考える人とそうでない人では結婚願望に差があることが分かった。そこで両親のような結婚生活を送りたい、つまり両親のような結婚生活への憧れは、何に起因するののかということを検証する。そこで、「両親の夫婦関係を良好と捉えるほど、また両親の生活上の自由度が高いほど、両親のような結婚をしたいと思う」という仮説を立て、従属変数に q04b で問うた「両親のような結婚生活への憧れ」、独立変数に q03a, b, c, d を合成した「両親の夫婦仲」、q03e, f, g, h を合成した「両親の自由度」と設定し、重回帰分析を行った。なお、B は非標

準化回帰係数、 β は標準化回帰係数を示している。

表 5.1 から「Y=両親のような結婚生活への憧れ」「X₁=両親の夫婦仲」「X₂=両親の自由度」とすると、このモデルの決定係数は 0.501 であり、1%有意水準で有意であるから、このモデルは約 50%仮説を説明している。標準化回帰係数を見てみると、「両親の夫婦仲」の値は 0.709、「両親の自由度」の値は-0.02 であり、「両親の夫婦仲」の値のみ、5%有意水準で有意であった。ことから、「両親のような結婚生活への憧れ」に対して、「両親の夫婦仲」の方が相対的に影響力が強いことが分かった。

表 5.1 「両親のような結婚生活への憧れ」を従属変数にした重回帰分析結果

独立変数	両親のような結婚生活への憧れ		
	B	β	
(定数)	-0.429		
両親の夫婦関係	0.225**	0.709**	**
両親の自由度	-0.001	-0.002	
決定係数	0.501***		***
調整済決定係数	0.485***		***
N	66		

p<0.05 *p<0.01

最後に、従属変数に「結婚願望」、独立変数に「両親の夫婦仲」「両親の自由度」「両親のような結婚生活への憧れ」を設定した際の変数の関係について重回帰分析を用いて検証する。表 5.2 から「Y=結婚願望」「X₁=両親の夫婦仲」「X₂=両親の自由度」「X₃=両親のような結婚生活への憧れ」とすると、このモデルの決定係数は 0.281 であり、1%有意水準で有意であるから、このモデルは約 28%仮説を説明している。標準化回帰係数を見てみると、「両親の夫婦関係」の値は-0.395、「両親の自由度」は 0.103「両親のような結婚生活への憧れ」の値が 0.705 であり、「両親の夫婦関係」は 5%有意水準で「両親のような結婚生活への憧れ」は 1%有意水準で有意であった。このことから相対的に「両親のような結婚生活への憧れ」が「結婚願望」に最も影響を及ぼすことが分かる。ところで、多重共線性を検証するために VIF の値を見てみると、「両親の夫婦関係」・「両親のような結婚生活への憧れ」の項目の値が 2 を超えている。ここから、独立変数間に多重共線性が存在することが疑われるので、独立変数間の相関分析を行い、その結果を表 5.3 に示した。表 5.3 から、「両親の夫婦関係」と「両親のような結婚生活への憧れ」の相関係数が 0.708 であり、両変数の相関が高いことが分かった。そこで「両親の夫婦関係」を除外して再度分析を行った。その結果が表 5.4 である。「Y=結婚願望」「X₁=両親の自由度」「X₂=両親のような結婚生活への憧れ」とすると、このモデルの決定係数は 0.217 であり、1%有意水準で有意であるから、このモデルは 22%仮説を説明している。標準化回帰係数を見てみると、今回も「両親のような結婚生活への憧れ」の値が最も高く、「結婚願望」に影響を及ぼすことが分かった。

表 5.2 「結婚願望」を従属変数にした重回帰分析結果

独立変数	結婚願望		
	B	β	VIF
(定数)	2.893		***
両親の夫婦関係	-0.126	-0.395	**
両親の自由度	.046	.103	
両親のような結婚生活への憧れ	.706	.705	***
決定係数	.281		***
調整済決定係数	0.246		***
N	66		

p<0.05 *p<0.01

表 5.3 独立変数間の相関分析表

	両親の夫婦関係	両親の自由度
両親の自由度	0.547***	
両親のような結婚生活への憧れ	0.708***	0.385***

***p<0.01

表 5.4 「結婚願望」を従属変数にした追加重回帰分析結果

独立変数	結婚願望		
	B	β	VIF
(定数)	2.696		***
両親の自由度	-.011	-.024	
両親のような結婚生活への憧れ	.475	.475	***
決定係数	.217		***
調整済決定係数	.192		***
N	66		

p<0.05 *p<0.01

6 考察

本研究は、「両親の夫婦関係は、結婚観に影響を与える」という理論仮説の下、両親の関係性に対して子どもが抱く評価と、子どもの結婚願望の高さの関係を明らかにすることが目的であった。そのためにこれまで3つの仮説と2つの追加分析の結果を示してきた。仮説①と仮説②は証明することができなかった。つまり、子どもが抱く「両親の夫婦仲」や、「両親の自由度」の評価の高さは、自身の結婚願望には影響を与えないことが分かった。しかし、結婚願望について両親の影響は存在しないといえるのかというと、そうではない。仮説③では「両親のような結婚をしたい」と肯定的に捉える人は結婚願望が高いことが分かっており、追加分析を見ても、「両親のような結婚をしたい」と肯定的に

捉えるほど、結婚願望が高くなることが分かった。このことから子どもの結婚願望は両親の影響をうけているということが示唆される。そのさい、「両親の夫婦仲」の良さや、「両親の自由度」の高さは子どもの結婚願望に直接には影響を及ぼさないが、子どもが「両親のような結婚がしたい」と漠然と感ずることによって結婚願望が高くなる。また、「両親の夫婦仲」や「両親の自由度」は結婚願望に直接には影響を与えないが、追加分析から「両親のような結婚がしたい」には「両親の夫婦仲」は影響を及ぼすことから、間接的に結婚願望に影響を及ぼすことが伺える。なお、本研究では子供の結婚願望に影響を与える変数として「両親の生活上の自由度」を想定していた。自身の両親の結婚生活を見て、両親の双方が互いに相手の自由な時間を制限しないと評価すれば、自身の将来の配偶者とも自由な時間を持ち続けられると感じ、結婚願望が高くなると想定していた。しかし仮説①の結果や追加分析の結果から、「両親の生活上の自由度」は自身の結婚願望に影響を及ぼさなかった。

「第14回出生動向基本調査」によって未婚にとどまる理由として「独身の自由さ・気楽さを失いたくない」と挙げられているような、「結婚すると、自分の自由な時間が失われる」という考えは、両親の結婚生活の影響ではないことが分かった。それではこのような結婚すると自由が失われるというような考え方はなにに起因しているのか。これは、現在多くの若者が一人暮らしを経験していることが考えられる。自身が一人暮らしの生活を送っており、自分の自由な時間が多く存在する現状を踏まえて「独身の自由さ・気楽さを失いたくない」と感ずるのであろう。つまり、この考えの要因には両親の影響ではなく、自身の経験によるものだと考え得る。

本研究では両親の関係性に対して子どもが抱く評価と、子どもの結婚願望の高さの関係を明らかにすることが目的であったが、課題も残った。それは、結婚願望を規定する他の変数を作成できなかったことである。今回の調査では両親の夫婦関係に関する質問項目は設定していたが、その他の影響(例えばドラマや友人関係)に関する項目を設定しなかった。これらの項目を設定し、統制変数とすることで、結婚願望に関する両親の関係の影響をより正確に捉えることが可能であったはずである。

〈参考文献〉

- 水落正明, 筒井淳也, 朝井友紀子, 2010, 「結婚願望は弱くなったか」, 佐藤博樹, 永井暁子, 三輪哲, 『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』, 勁草書房:97-109.
- 山内星子, 伊藤大幸, 2008 「両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響—青年自身の恋愛関係を媒介変数として」, 発達心理学研究:19(3) : 294-304.
- 森岡清美・望月嵩, 1997, 『新しい家族社会学』, 培風館.
- 斎藤嘉孝, 2012, 「定位家族の親夫婦の関係性が若者の結婚への態度に与える影響—大学生を対象とした量的調査の結果より」, 法政大学キャリアデザイン学部紀要(9) : 369-379.
- 筒井淳也, 2010, 「結婚についての意識のズレと誤解」佐藤博樹, 永井暁子, 三輪哲『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』, 勁草書房 : 110-126.